リレーエッセイ

若者へのメッセージ㊷

漫画家　竹宮　惠子

【第一回】文字との出会いを思い出して

出会いが積み重なって「その人」をつくる。文字、ゲーム、スポーツ、宇宙や地質学、数学、生物学…。難しそうでも、簡単そうでも、どれも等しく人をつくる出会い。他人には見えなくても、その小さな衝撃はあなただけのものだ。これから何かとの出会いを果たす若い人には、窓を開いていて欲しい。

文字の世界へ

文字との出会いはいつの頃だっただろうか。

わたしたちは誰でも幼稚園や小学校で文字を習い始めて、ようやく文字という独立した存在に気づく。それまでは指に絡みつくリボンや、ほっぺを膨らませて口の中を転がるアメ玉とたいして違わなかった。子どもは未分化で、見たものや聞いたもの、触った記憶、そうそう、積み木の塗料の苦さなども、みんな一緒くたに頭の中に乱雑にたくわえている。それが意味あるものや、名前のあることがらになっていくのは、言葉と文字とが結びつき、それ以外の何ものでもない形に収まっていくからなのではないか。

スケールの違いはあるかもしれないけれど、もしかしたらわたしたちは、三重苦（目が見えず、耳が聞こえず、しゃべれない）のヘレン・ケラーが初めて「水」というものに名前があると気づいた日のような衝撃を、じつは数限りなく繰り返して「世界」を知っていくのだと言えないだろうか。そうだとしたら、ちょっと感動的？　いや、もちろん、これはわたしのささやかな妄想に過ぎないけれど、言葉を書き、書をしたためる人には、きっとわかってもらえるという気がしている。

文字を知り書くことによって、地面に描く陣取りゲームのように、少しずつ世界は広がる。そんなことを思いながら文字を学び、書く人は

竹宮　惠子（たけみや・けいこ）

1967年、虫プロ「COM」の月例新人賞に佳作入選。1968年、集英社「マーガレット」の新人賞に佳作入選し17歳でデビュー。徳島大学在学中から連載を持ち、代表作『風と木の詩（ウタ）』『地球（テラ）へ…』で1980年に第25回小学館漫画賞受賞。両作品ともアニメ化されている。『地球へ…』は2007年に再びTVアニメ化された。

少女マンガ・少年マンガ・企業マンガとさまざまなジャンルで執筆。

2000年より京都精華大学芸術学部マンガ学科教授。2014年には同大学長に就任。同年、紫綬褒章受章。2018～2024年日本マンガ学会会長。2020年3月定年退職。同年4月同大名誉教授。日本漫画家協会理事。

そう多くはないかもしれない。多くはないかもしれないけれど、どこか頭の片隅やからだのどこかにその意識がかくれているのだろうと考えてみたら、小学校時代に何百回も文字を書き取りしていたことを思い出した。マスの中に十字を引き、「か」という文字のバランスをからだに覚え込ませる。

今はもうそんなアナログな学習法はしないだろうと思われる（？）が、100回分、書き取り用紙に書かれた「か」は、一堂に会して全部を見渡せる状態になる。その字を書きつけた本人が、それぞれの字を見比べ、批評的な目でどの字が理想的かを探る。そうして選び取られたいくつかの「か」が、わたしの書く字となっていくのだ。

©KeikoTAKEMIYA2004 スター☆KIDの不毛な冒険 より

その字はもう、ほっぺの中のアメ玉とは違って、ある種創作されたものとして自分の中に記憶される。それは自分との密やかな約束事でもあり、遊びに似た楽しみでもあった。

字の成り立ちに惹かれて

次に誰にでもある不思議な文字への疑問について。誰にでも、と書いたけれど、本当にそうかどうかはわからない。自分の思いを友人に告げ、同じ経験があるかと聞いてみたが、「あるある、文字って変だよね」という答えだったと記憶している。小学校4、5年生ごろだった。文字を書いていて、ふと、「なぜこの字はこんな形なのか」「誰がこの字を『で』だと決めた？」どうして自分はこの字を「あ」だと思うのか。またほかの誰かが書いた「あ」をなぜ間違わずに「あ」と読めるのか。その疑問が初めて胸の中に起きたとき、ちょっとした眩暈のような混乱があって、文字がまともに読めない数十秒間があった。まだ小学生時代のことなので、そんなことはすぐに忘れて元の日常に戻ったけれど、クラクラした数秒間のことは鮮明に覚えている。

また、もう一つの不思議は漢字の読みが音訓ふたつあること。これまた「どうして？」がいくつも湧き出てくる原因だった。先生たちからその由来について丁寧な説明などはない（しても多分わからないから？）まま、頭から丸覚えするのが当たり前だったので、由来も知らないままに大人になって、白川静名誉教授の「字訓」に出会う。

幸運だったのはこの辞書の編纂が「もうすぐ終わる」というときにニュースとしてその新聞記事を読んだことだった。わたしの時代（わたしはもうじき75歳）の学生が学生運動でバリケードを張っているときに、学生が敬意を持ってバリケードを開き、白川教授を必ず研究室へ通したとの記事。もう理由も何もなく、内容をよく知りもせず「出版されたら必ず買う！」となっていた。それだけ長い年月の研究によってならば、わたしの思う漢字の不思議が解き明かされる気がしたのだ。思っていた通りに漢字は絵に限りなく近い。意味を含む絵として書き継がれるうちに漢字という字になった。自分の職業が漫画家だからかもしれないが、伝えるためにする工夫が、絵にも字にも共通する役割としてあるのだと、しみじみと感じた。

こんなふうに出会いは人の世界を少しずつ広げてくれる。誰にでもそういう出会いはあったはず。もう忘れているかもしれないけれど、記憶をたどってみて欲しい。なぜ今、あなたが文字と向き合っているのか、を。